2026年11月25日 公表｜2026年11月26日 掲載

パブコメ17,757件の中身と全教科の「精選」案 まるごと解説

次期学習指導要領の「審議まとめ」へのパブリックコメントの結果と、同じ日の中教審 特別部会で示された**全教科の「内容の精選」の検討状況、子供への意見聴取**の結果を、1ページにまとめました。すべての項目に出典ページがついています。

更新：2026年11月26日　PDFで印刷

まず30秒で 今回わかったこと

1. 審議まとめへの意見は**17,757件**。前回の改訂のとき（2,974件）の約6倍で、**約57%（10,036件）が教職員**から。
   結果P3 資料1P2

2. 基本の考え方（深い学び・多様性の包摂・実現可能性）には**肯定的な意見**が寄せられた一方、**条件整備と先生の負担軽減**を求める声が多かった。
   資料1P2

3. 意見が割れたのは**授業時数**（減らしてほしい／減らすと学力が心配）と**AI**（教えるべき／学校で使わせるべきでない）など。文部科学省は「バランスに配慮した丁寧な検討が求められる」と整理。
   資料1P2

4. 同じ日の特別部会では、**各教科等（全教科・道徳・特活・総合など）の「精選」の検討状況**も示された。「減らすための精選」ではなく**「学力向上に資する精選」**とし、教科ごとに統合・移行・示し方の見直しの具体例が並んだ（検討中の案）。
   資料2P2

5 意見は**答申案・告示案**や、その後の条件整備で勘案される。**告示案は年度内にもう一度パブリックコメント**を行う予定。次は**12月7日の特別部会で「答申（案）」**。

資料1P2

読み方の注意 意見 パブコメの声は「国民から寄せられた意見」で、国の決定ではありません。 検討中 教科ごとの「精選」は11月25日時点の検討状況（案）で、答申・告示に向けて変わる可能性があります。

1. 数字で見るパブコメ

意見の数・出した人の内訳

提出された意見

17,757件

個人12,677・団体774・不明4,306

前回の改訂のとき

2,974件

今回はその約6倍（6.0倍）

教職員からの意見

10,036件

全体の56.5%（半数以上）

職業など（件数）

教職員	**10,036**	56.5%
その他	**1,226**	6.9%

年代（件数）

10歳未満	**1**	0.0%
10代	**25**	0.1%

保護者	723	4.1%
大学・研究機関等関係者	470	2.6%
教育委員会関係者	99	0.6%
学生等	98	0.6%
児童・生徒（小・中・高校段階等）	25	0.1%
団体として提出	774	4.4%
無回答	4,306	24.2%

20代	786	4.4%
30代	1,291	7.3%
40代	1,377	7.8%
50代	1,140	6.4%
60代	559	3.1%
70代	201	1.1%
80代	22	0.1%
90代	3	0.0%

※ 年代は「無回答」が12,352件（69.6%）あり、グラフからは除いています。

※ フォームの回答は12,029件。1回の回答で最大10件まで意見を出せる方式だったため、回答の件数と意見の件数は一致しない。 結果P3 資料1P2（前回改訂時の件数）

2. 文部科学省はどう受け止めた？

特別部会（11月25日）の資料1で、ヒアリングとパブコメの意見を3つに整理

1

基本の考え方には肯定的

「深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」の必要性、「好き」を育み「得意」を伸ばすことの重要性、先生と子供に「余白」を生み出すこと、調整授業時数制度などの柔軟な教育課程の方向性を評価する意見。

資料1P2

2

でも、条件整備と負担軽減を

学習指導要領の内容や教科書の精選、教職員定数の改善、専門人材の確保、情報の新教科・領域のための国主導の教員養成・免許制度の見直しや研修機会、質の高い学習動画・研修動画の開発・提供、柔軟な教育課程の具体的な実践事例の提示などを求める意見が多かった。

資料1P2

3

立場によって意見が分かれた点

標準授業時数を減らしてほしい
声と、時数を減らすと学力低下に
つながりかねないので慎重にという
声、調整授業時数制度のような
柔軟な仕組みで対応すべきという
声。AIに関する教育が必要という
声と、学校教育でAIを
使わせるべきでないという声。

資料1P2

⇒ これからどうなる？

答申案や告示案のほか、答申・告示のあとに文部科学省が行う条件整備などで勘案する。年度末の小・中学校学習指導要領等の改訂に向け、告示案については年度内に再度パブリックコメントを実施する予定。

資料1P2

▼ 関係団体ヒアリング：43団体＋書面11団体の一覧を見る

パブリックコメントと並行して、2026年10月に特別部会が4回に分けて合計43の関係団体からヒアリングを行い、11の団体から書面で意見が出された。

資料1P2 資料1P3

10月8日（木）

- 全国認定こども園協会
- 全国町村教育長会
- 日本青年会議所
- 全国養護教諭連絡協議会
- 日本PTA全国協議会

10月15日（木）

- 全国連合小学校長会
- 全国特別支援学校長会
- 全国公立小・中学校女性校長会
- 全国幼児教育研究協会
- 全国認定こども園連絡協議会

- 日本若者協議会
- 全国特別支援教育推進連盟
- 認定こども園連盟
- 日本教職員組合
- 全国学校栄養士協議会
- 全国公立小中学校事務職員研究会
- 全国公立高等学校事務職員協会
- 全国高等学校文化連盟
- 全国公立文化施設協会

10月21日（水）

- 全国高等学校長協会
- 全国特別支援学級・通級指導教室設置学校長協会
- 全国へき地教育研究連盟
- 全国都市教育長協議会
- 日本私立小学校連合会
- 新経済連盟
- 日本労働組合総連合会
- 全日本教職員組合
- 全日本教職員連盟
- 日本高等学校教職員組合
- 日本スポーツ協会

10月30日（金）

- 全日本中学校長会
- 全国公立学校教頭会
- 全国国公立幼稚園・こども園長会
- 全日本私立幼稚園連合会
- 全国都道府県教育委員会連合会
- 全国市町村教育委員会連合会
- 中核市教育長会
- 日本私立中学高等学校連合会
- 日本経済団体連合会
- 日本商工会議所
- 日本宗教連盟
- 国立大学協会
- 日本教育大学協会

書面で意見を出した団体：全国連合退職校長会、指定都市教育委員会協議会、経済同友会、全国教育管理職員団体協議会、日本中学校体育連盟、全国高等学校体育連盟、日本学校体育研究連合会、全国公立短期大学協会、日本私立大学団体連合会、日本私立短期大学協会、全国高等学校PTA連合会

※ 団体名は法人格（公益社団法人など）を省略しています。

3. 総論・学校段階へのパブコメの主な意見

文部科学省の「主な意見の概要」を、項目ごとに分かりやすい言葉で（全部の意見ではなく、国がまとめた主な意見です）

第1部 次期学習指導要領の基本的な方向性

次期学習指導要領の基盤となる方向性

- 「主体的・対話的で深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」という方向性には賛同。ただし理念の実現を先生一人一人の努力に任せず、現場で実践できる条件を整えることが欠かせない。 結果P4
- 「自らの人生を舵取りする」姿を掲げるのは意義があるが、自分の「好き」「得意」が分からない子や、自己調整が難しい子もいる。どんな支援や配慮をするかの視点も必要。 結果P4
- 多様性の包摂は大事だが、1階（通常の教育課程）・2階（個別の教育課程）という複層的な教育課程による支援が、子供の分離・分断につながらない配慮が必要。両方が関係し合う「包含性」の視点を。 結果P4

分かりやすく使いやすい学習指導要領

- 「統合的な理解・総合的な発揮」で授業改善のイメージは明確になった。ただ個別の知識・技能を必要な場面で使えることも引き続き大事。個別の資質・能力の獲得が軽く見られないよう、両者の関係を分かりやすく示してほしい。 結果P4
- デジタル学習指導要領の公開による「社会に開かれた教育課程」の深化には賛成だが、それだけでは保護者等には理解が難しい。やさしい説明資料や、PTA・社会教育士などを通じた学校と保護者・地域の対話の場づくりが必要。 結果P4
- 個に応じた学習過程を充実させるなら、教師による支援や指導の役割をはっきり示すべき。 結果P4

多様な子供を包摂する柔軟な教育課程（調整授業時数制度・高校の単位制など）

- 調整授業時数制度の創設には賛成。学校間・地域間の格差が生まれないよう、国が活用事例や伴走支援の例を発信してほしい。 結果P4

学習評価の見直し

- 「学びに向かう力」の評価の見直しには賛同。でも観点別評価をしないことで「評価しなくていい」「重視しなくていい」と誤解されたり、これまでのように

- 調整授業時数制度の「研究・研修等枠」の上限を年間35コマにした趣旨を、丁寧に説明してほしい。 結果P4
- 「好きを育み、得意を伸ばす」なら、探究や特別活動以外でも子供の選択肢を増やしてほしい。 結果P4
- 特別の教育課程には賛成。ただし通常学級での居場所を保つこと、学習内容や目標の調整が学ぶ機会を狭めるのではなく教育の質の確保になるよう、本人・保護者と定期的に見直すことを求める。 結果P4
- 高校の単位制の柔軟化は評価できるが、単に単位を減らす方向だけに使われるのは避けるべき。具体的な運用方法も合わせて示すべき。 結果P4
- 高校の単位数が多すぎて生徒の負担が増えないよう、具体的な方策が必要。 結果P4

「見取る姿」集めに終わったりしないか心配。丁寧な運用の整理と周知を求める。 結果P4

- 評価は本来、学習状況をつかんで指導や支援を良くするためのもの。今は「記録に残す評価」ばかりが重く見られ、子供と向き合う時間や指導改善の時間が奪われている。改訂を機に「指導に生かす評価」の大切さをはっきりさせてほしい。 結果P4
- 「学びの改善のための評価」への転換を実のあるものにするため、現場が複雑なルーブリックや基準を作って管理することにならないよう、国が示す手引きはシンプルに。 結果P4

情報活用能力の抜本的向上（AI・メディアリテラシーを含む）

- 学校の規模や地域の財政状況による格差や先生の負担が生じないよう、ICT環境・教材・

「余白」の創出と標準授業時数

- 「深い学び」「多様性の包摂」のための余白づくりに向け、学習指導要領の内容と教科書の精選を確実に行うことに強く

専門人材の配置などを国が整備してほしい。 結果P5

- 新しい教科・領域を作るなら、各教科全体で学習内容の精選が必要。 結果P5
- SNSなどで偽情報・誤情報の拡散が問題になっており、メディアリテラシーや情報モラルが必要。民主主義社会での報道機関の機能や役割についての学習も充実を。 結果P5
- デジタルツールを「使うこと」自体が目的にならないよう、育てたい資質・能力に照らして「使わない」選択も含めて先生が必要性を判断すること、使用頻度などを学習成果と混同しないことを明確にすべき。 結果P5
- AIは便利な反面、子供たちの思考を止めることにつながりかねない。 結果P5
- AIを「使う」「使わない」の二択ではなく、どの場面でAIを使い、どの場面で子供自身の思考を確保するかという単元設計の例や、AIの使い方で学習効果が変わり得ることを示すべき。 結果P5

期待。精選の具体的な内容と削減の見通しを示し、教科書の分量も精選した内容に見合う水準まで確実に減らすことが必要。 結果P5

- 内容の削減は勤務時間を減らすことだけを目的にせず、重複や効果の薄い活動を減らすべき。精選で生まれる時間的な余白は「何もしない時間」ではなく、より豊かで魅力的な学びにつながる。 結果P5
- 「余白」を生み出すには、内容の精選と年間総授業時数の削減が必要。 結果P5
- 一方で、先生の負担軽減や「余白」づくりを理由に各教科等の授業時数を減らすことには反対。時数を減らすと、基礎・基本の確実な定着や豊かな学びの機会が損なわれるおそれがある。 結果P5

次期学習指導要領を実現するための条件整備

- 先生の業務を本当に必要なものに精選・重点化すること、授業づくりに専念できるよう教員業務支援員や専門スタッフの配置拡充、校務DXの推進などが必要。 結果P5
- 教育の質を高め、子供に向き合う時間を生み出すため、教員定数の大幅な改善と教師不足の解消を求める。 結果P5
- 企業・大学・自治体・地域人材などとの連携が先生個人の人脈頼みにならないよう、地域学校協働活動推進員などの仕組みを使ったコーディネート機能を充実すべき。 結果P5
- 学習指導要領が目指す資質・能力と合うよう、高校入試制度の改革が必要。教育課程・評価・高校入試を一体で捉えた制度の見直しを求める。 結果P5

第2部 第1章 学校段階・教科等横断的な事項

総則に関わる事項

- 総則の理念は理解するが、新しい事項の追加で現場に過度な負担を

幼児教育

- 幼稚園教育要領・保育所保育指針・

かけないよう、内容の簡素化と明確化を求める。 結果P6

- 「特別な配慮を必要とする児童への指導」を「第2教育課程の編成」へ移すことは、通常の教育課程（1階）と個別の教育課程（2階）を一体的・相互に行き来するものとして捉える観点から意義がある。 結果P6
- 部活動と地域クラブ活動を総則で併記する方針は理解するが、地域展開の見通しや教師の兼職兼業の扱いを指針などで示すべき。 結果P6
- こども基本法の趣旨を踏まえた教育課程の編成・実施となるようにすべき。 結果P6

幼保連携型認定こども園教育・保育要領を、0歳から小学校就学前までを対象とする一つのナショナルカリキュラムとして統合・一元化してほしい。 結果P6

- 「遊びを通した学び」の考え方を小学校の関係者などとも共有すべき。園と小学校の情報交換や合同研修など、子供の具体的な姿を起点に語り合う連携を支援してほしい。 結果P6
- 乳幼児期は自然体験・身体活動・対面のコミュニケーションを優先すべき。ICTの活用は、体への影響や依存傾向などの課題を踏まえて慎重に。 結果P6

特別支援教育

- インクルーシブな教育を目指す方向性に賛成。一方、通常の学級で共に学ぶには教職員配置・支援員・合理的配慮・教材・情報保障・施設整備などが不足していると感じるので、人的・物的な条件整備を進めてほしい。 結果P6
- 実際の学びの場は、本人・保護者の意向を尊重し、十分な

高等学校定時制・通信制

- 通信制課程には不登校経験者や特別な支援が必要な生徒など多様な背景の生徒がいて、様々な学習ニーズに応じる必要がある。オンラインやデジタルの強みを生かした工夫の例を示してほしい。 結果P6
- 単位制の柔軟化で生まれる教育上の余裕を生かせるよう、添削指導・面接指導の回数などに

情報提供と合意形成を経て
決めるべき。 結果P6

- 自立活動の時間の指導と
各教科等の指導を密接に
関連させる実践が、十分に
重ねられる必要がある。 結果P6
- 社会モデル・子供主体・
環境因子・自己選択・自己決定と
いった視点を、日々の授業や
先生同士の対話にどう生かすかが
重要。 結果P6

ついて、教育の質を
保ちながら合理的な制度設計を
求める。 結果P6

- 生徒が心身の状態や生活環境の
変化に応じて、全日制・定時制・
通信制の間の単位互換や課程間の
移動を円滑にする方向性を
示すべき。 結果P6

第2部 第3章 個別の子供のための特別の教育課程

不登校児童生徒に係る特別の教育課程

- 前提として、通常の教育課程の
包摂性を高める努力を
すべき。そのためにも
学習内容の精選や余白づくりに
取り組むべき。 結果P11
- 子供の意見を尊重し、子供自身が
計画づくりに深く関わり、
自己選択・自己決定の機会を
設けることを重視している点に
賛成。制度を使うかの判断も
含め、本人の意思や心身の状態を
丁寧に確かめ、関係者と一緒に
計画を見直したり、中断や終了も
含めて多様な選択肢から
選び直せたりする仕組みにして
ほしい。 結果P11

特定分野に特異な才能のある児童生徒に係る特別の教育課程

- 「多様性の包摂」を基盤に「好き」
を育み「得意」を伸ばすことを
重視し、困難の軽減・解消、
才能の伸長、社会的な成長を
一体的に目指す方向性は、
学校教育の発展に向けた重要な
前進。 結果P11
- 困難への対応と才能を
伸ばすことを別々に考えたり、
困難が解消されてから
才能を伸ばすという順番で
捉えたりしないことが
大切。 結果P11
- 子供の認知特性などの理解を
深める教員研修や、担任個人に

- 不登校支援を実効あるものにするには、校内外の教育支援センターなどで対応する職員の配置を国が進めるべき。 結果P11
- 学校だけを前提にせず、不登校の子供が自分に合った多様な学びの場を選べることが大切。フリースクールなど学校外の場も含めて公的に支援し、格差なく学べる環境を保障してほしい。 結果P11
- 学習評価について、学校や先生によって差が出ないよう、一定の考え方や指針を示してほしい。 結果P11
- 内申書の提出を前提としない入試の充実など、高校入試制度の改革も合わせて進めてほしい。 結果P11

頼らず複数の教員が連携する支援体制の整備が必要。 結果P11

- 学校や教育委員会だけに頼らず、大学などへ相談できる仕組み、教育課程の編成や外部機関との調整などを継続して支援できる相談支援拠点の全国的な整備が必要。博士号取得者などの高度専門人材の活用も有効。 結果P11
- 特別の教育課程の必要性は理解するが、その編成にかかる現場の負担を減らしてほしい。 結果P11

4. 授業はどう変わる？全教科を1行で

特別部会の資料2「各教科等の内容の精選の検討状況について」から

まず大前提：今回の「精選」とは

資料2の最初のページ。審議まとめ（2026年10月5日）のP58の記述を、答申案に向けてこう更新するという方向性として示されたもの

精選は「見直しの大きなきっかけ」

「統合的な理解・総合的な発揮」で内容を構造化することは、深い学びに向けた授業づくりを支え、学習指導要領の個別の学習内容を「各教科等の本質的な理解の獲得を重視する観点から本当に必要か」という視点で見直す大きなきっかけになる。

資料2P2

「精選のための精選」ではない

今回の「精選」は、内容を減らすこと自体が目的ではない。「確かな知識」の習得を含め、個別の知識・技能や思考力・判断力・表現力などを、より質高く身に付けるためのもの。端的に言えば「学力向上に資する精選」でなければならない。

資料2P2

精選の進め方（3つの手順）

①豊かな学習活動につながり、系統性を損なわない範囲で、精選できる対象を慎重に特定しながら個別の資質・能力を整理する（表形式の示し方で、深い学びのための余白が十分かも検討）。②整理した個別の資質・能力を踏まえて、「統合的な理解・総合的な発揮」が妥当かを点検し、必要に応じて修正する。③あわせて、その教科等の教科書の在り方を、内容の精選の在り方も含めて検討する。

資料2P2

義務教育では時数の面からも

情報活用能力の抜本的向上に必要な授業時数を、標準総授業時数を増やさずに確保するため、35コマ以下のものを除く各教科等で、標準授業時数に応じて同じ考え方で減らして確保する。また調整授業時数制度で標準を下回ってよい上限は、35コマ以下の教科等を除く対象教科等の最大15%とする。こうした点への対応も踏まえ、精選の在り方を一層具体化する必要がある。

資料2P2

これから文部科学省がさらに具体化

告示や解説を作る検討の中で、文部科学省がさらに具体化する。その際の観点は、1)情報活用能力の

ための時数を確保する
標準授業時数の減に対応する、2)
そのうえで深い学びのための余白を
十分に確保する、3)教科等の
本質的な理解に役立ち、
調整授業時数制度を使った
教育課程編成を可能にする教科書の
精選につながる、の3つ。

資料2P2

教科等	授業はこう変わりそう（資料から読み取れること）	出典
国語	「読むこと」で読んだ文章の話題を「話すこと・聞くこと」に生かすなど、3つの領域をつないだ単元づくりへ。同じ力を何度も扱うか、十分なら省くかを柔軟に。	資料2P3
社会・地理歴史・公民	網羅的な知識の学習になりがちだった項目（例：小学校の歴史上の主な事象）は、焦点を絞って深く学ぶ示し方へ。用語は「問いの解決に必要か」で精選。似た地域を比べて考察するなど、重複していた学習をまとめる。	資料2P3
算数・数学	データから帰納的に考えさせる指導と、先生が原理・法則から演繹的に導く指導の「バランス」を。アール・ヘクタールの単位換算は複雑な計算練習より概念理解を中心に。帯分数も概念理解を中心に。	資料2P4
理科	観察・実験と、その結果の考察に時間を回す。器具の操作だけを単独で指導・評価することを見直し、時間のかかる目視の観察はICTを併用して効率化。	資料2P4
音楽	技能を生かして工夫して表現するプロセス全体を「思考・判断・表現」として一体的に整理。小学校の歌唱と器楽の内容区分を統合し、知識と	資料2P5

教科等	授業はこう変わりそう（資料から読み取れること）	出典
	技能も一体で示す。題材の数を絞って、 つながりのある題材構成へ。	
図画工作・美術	発想や構想から工夫して表現するまでを一つの 流れとして指導。共同制作は「一緒に作ること」 そのものではなく、関わり合いを一人一人の 豊かな発想につなげる場に。	資料2P5
家庭	技能を一つずつ練習するより、一連の活動の中で まとめて身に付ける。「なぜこの縫い方を 使うのか」など、製作の目的を考える授業へ。	資料2P5
情報・技術（中）／情報（高）	作図の手順や規則を覚えること自体を目的に せず、その意義や役割の理解を重視。新設の 情報・技術科は、「深い学び」の実現や 調整授業時数制度の活用を前提に「余白」を もたせて内容を設定。	資料2P5
体育・保健体育	2年間のまとまりで計画して、毎年すべての 運動をこなす状況をなくす。「種目」より 「どんな動きを経験・習得するか」を軸に。必ず 扱う内容＋選んで実施できる内容へ。	資料2P6
外国語活動・外国語（英語）	中学校の話題は「身近な社会的な話題」に。 頻出の文法を具体的に示して焦点化。CEFRに 照らして難しすぎる活動は見直し、先生の 足場かけを前提に示す。語彙は、国が今後作る 基盤語彙リストを基に、小中高を通して 繰り返し扱う方向。	資料2P6
特別の教科 道徳	1つの教材を複数時間で扱い、生まれた余白を 問題解決的な学習や体験的な学習と組み合わせて 「じっくりと深く学ぶ」道徳へ。教科書の 読み物教材は精選。	資料2P7
特別活動	評価は目標準拠評価から個人内評価へ（成長が 顕著なら「◯」）。キャリア・パスポートは 例示資料を廃止し、学校による引継ぎを求めない	資料2P7

教科等	授業はこう変わりそう（資料から読み取れること）	出典
	ことを明確化。学級・ホームルーム活動の項目は統合。	
総合的な学習（探究）の時間	全体計画や評価規準づくりは本当に必要なものに絞り、評価材料の集めすぎを抑えてシンプルに。地域とのコーディネートは学校運営協議会や地域学校協働推進員と連携する選択肢を。	資料2P7
生活	複数の内容を組み合わせた単元をつくり、重複や分散を防ぐ。1年と2年の両方で同じことをしなくてよい（例：1年は植物の栽培のみ、2年は動物の飼育のみとすることも可能）。	資料2P7

※「授業はこう変わりそう」は、資料2に書かれた精選の方向性と具体例を、当サイトが授業の場面に置きかえて短くまとめたものです。資料にない内容は足していません。「移す」「まとめる」などの言い方は、いずれも特別部会の資料に示された**検討中の方向性**で、告示された内容ではありません。詳しくは次の「教科別」で原文の要旨と具体例を確かめてください。

5. 教科別：パブコメの声 × 国の「精選」の検討状況

左が国の検討状況（具体例つき）、右がパブコメで出た主な意見。教科名を押すとその教科へ飛びます

※ 左の「国の精選」は11月25日の特別部会資料2に示された検討中の方向性（案）です。告示ではないので、答申・告示で変わることがあります。

国語 小・中・高

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

「読むこと」で読んだ文章の話題を「話すこと・聞くこと」に生かすなど、3つの領域をつないだ単元づくりへ。同じ力を何度も扱うか、十分なら省くかを柔軟に。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 「構成の検討」「表現」「共有」のように学習過程ごとに細かく分けていた「思考・判断・表現」の指導事項を、話や文章が社会的な文脈の中で果たす主な機能（「話や文章の機能」）を軸に大ぐくりにして整理し直し、事項の数を精選する。

具体例

- 「意見を述べる文章」という文章の種類と、「主張を明確にする」「表現を工夫する」などの思考・判断・表現の要素を、一括りの事項として示す。

資料2P3

2. 教科全体 これにより題材数の精選につなげるほか、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域を関連させたり、複数の学習過程を統合したりした単元づくりを可能にし、指導内容の重複を避けながら「統合的な理解・総合的な発揮」を育てる授業を目指す。

具体例

- 「読むこと」の単元で学習した文章の内容に関連した話題や題材を使って「話すこと・聞くこと」の単元を行い、情報収集や自分の考えをもつことにかける時間を精選する。

資料2P3

3. 教科全体 指導事項を大ぐくりにすることで、同じ資質・能力に関する内容を複数の単元で繰り返し扱って理解を深めたり、理解が十分な場合は逆に繰り返しを避けたりする工夫を柔軟にできるようにする。調整授業時数制度を使った柔軟な教育課程編成もしやすくする。

資料2P3

4. 教科全体 「知識・技能」も必要に応じて分割・統合するなどして、育てたい資質・能力や系統性がはっきりするように精選する。

具体例

- 「漢字の読み書き」と「偏やつくり」の内容を統合して、一括りの事項として示す。

資料2P3

5. 教科全体 教科書は、思考・判断・表現の指導事項の大ぐくり化や、「基幹教材」と「関連教材」の明確化、系統性の明確化によって、題材などの

整理を促す。

資料2P3

6. 個別の内容 「情報の領域」「情報・技術科」で指導を充実させることに伴う精選。

具体例

○ 小学校3年のタイピングは、情報の領域へ移す。

資料2P3

パブコメで出た主な意見

- 漢字・語彙・文法などの知識・技能の指導を重視すべき。 結果P7
- 書く力・読む力・コミュニケーションをとる力の育成を進めるべき。 結果P7
- 国語科と関連付けた学習で効果が期待できる新聞を活用した取組も、「裁量的な時間（学習枠）」の活用例として示してほしい。 結果P7
- 学校図書館の機能をさらに充実させるなど、各教科等を通じた読書習慣の形成やメディアリテラシーの向上を図るべき。 結果P7
- 高校の科目再編の方向性には賛成。再編の趣旨が実現したか、新しい学習指導要領の実施後早い段階から継続的に検証すべき。 結果P7

社会・地理歴史・公民 小・中・高

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

網羅的な知識の学習になりがちだった項目（例：小学校の歴史上の主な事象）は、焦点を絞って深く学ぶ示し方へ。用語は「問いの解決に必要か」で精選。似た地域を比べて考察するなど、重複していた学習をまとめる。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 教科書などについて、学習指導要領と教科書等の差分や入試問題の分析をもとに現状と課題をつかんだうえで、①「統合的な理解・総合的な

発揮」を踏まえた用語の精選、②課題（問い）を解決するために必要な用語の精選、の視点から「教科書等における用語等の精選方針（仮称）」を定め、用語の精選を進める。

資料2P3

2. 個別の内容 複数の項目をすべて扱うことにしているものは、「統合的な理解・総合的な発揮」を踏まえて一体的に扱えるようにし、子供が焦点化した項目を深く学べるようにする。

具体例

- 小学校で「生産」の仕事と「販売」の仕事を両方扱うことにしているものについて、育てる資質・能力の共通性が高いことから、地域などの実態に合わせてどちらかに重点を置きつつ、一体的に扱うこととする。

資料2P3

3. 個別の内容 複数の事項に散らばっている内容のうち、一つにまとめるのが適当なものを統合する。

具体例

- 中学校歴史で、各時代区分の政治・経済・外交に関する事項と、社会・文化に関する事項を分けて扱っていたものを一体的に扱い、相互の関連や時代の特色を理解できるよう項目を整理・統合する。

資料2P3

4. 個別の内容 内容に重複が多いと考えられるものを精選し、一つの項目を深く学べる余白を作る。

具体例

- 小学校「県内の特色ある地域の様子」で3つの特色ある地域を学習することにしていたものを、「伝統的な技術を生かした地場産業が盛んな地域」と「地域の資源を保護・活用している地域」のいずれかを扱うこととする。
- 中学校の「歴史的分野」と「地理的分野」の双方で地域調査を扱っていたものを、「社会へのまなざし」という分野横断の領域を作ったうえで、そこで一体的に扱うこととする。

資料2P3

5. 個別の内容 学習指導要領の趣旨と違って網羅的な知識が取り上げられがちな項目は、網羅的な学習を目指すものではないとはっきり分かるよう、

示し方を改善する。

具体例

- 小学校「我が国の歴史上の主な事象」で、「通史として網羅的に取り扱うものではない」旨を明記し、個々の事項を詳しく学習しすぎないよう項目の示し方を見直す。
- 中学校地理的分野の「日本の諸地域」で、「自然環境」「人口」「産業」「交通・通信」の4つの内容を地域ごとに考察していたものを、似た複数の地域などを比べながら考察することで、重複していた学習を精選する。

資料2P3

パブコメで出た主な意見

- 防災や気候変動の教育は、過去の災害を学ぶことに加え、将来の気候変動の影響・リスクを理解することも重要。 結果P7
- 検索結果の一番上にAIの要約が出て、歴史の説明も簡単に手に入る今、その説明が何に基づくのかを史料に戻って確かめる経験が、これまで以上に重要。 結果P7
- 主権者教育を進めるため、現実の具体的な政治的事象を積極的に扱うことが重要。政治的中立性を保つためにも、複数紙の記事を使った学習を進めてほしい。 結果P7
- 教科書の用語の精選は重要だが、国は一定の方向性を示したうえで、具体的な内容の検討は民間の関係団体に任せるべき。 結果P7

算数・数学 小・中・高

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

データから帰納的に考えさせる指導と、先生が原理・法則から演繹的に導く指導の「バランス」を。アール・ヘクタールの単位換算は複雑な計算練習より概念理解を中心に。帯分数も概念理解を中心に。

※ 精選の検討は、諸外国のカリキュラムや国際学力調査なども考慮して行ったと資料に注記がある。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 解説に示す学習活動の事例や指導法を、「統合的な理解・総合的な発揮」や先生の理解に必要なものに精選し、教科書の精選にもつなげる。調整授業時数制度を使った柔軟な教育課程編成もしやすくする。加えて、学校種を超える発展的内容やコラムなどには時数を配当しないことなどを教科書会社に要請する。
   資料2P4

2. 教科全体 子供の確かな理解と「深い学び」の観点から、実態に応じて具体的な事象のデータなどを帰納的に考察させて問題発見・解決を促す指導方法と、まず先生が主導して原理・法則などから結論を演繹的に導く指導方法などのバランスがとれるよう、教科書上の工夫を教科書会社に要請する。
   資料2P4

3. 個別の内容 複数の事項に散らばっている内容を、一つの項目で多角的・系統的に学べるよう、一つにまとめて重点的に指導するのが適当なものを統合する。

   具体例
   - 小学校算数「整数の表し方」で、4桁単位の数の区切りを集中的に学ぶ観点から、第4学年の「億・兆」の単位を知る学習を、第3学年の「万」の学習（万、十万、百万、千万）へ統合。
   - 中学校数学「円の接線」で、中1で行っていた円の接線の作図を、中3の円周角と中心角の関係において統合的に学習。
   - 小学校算数「起こり得る場合」を、中学校数学「確率」で統一的に学習。
   - 中学校数学「データの分布」のヒストグラムの学習の一部を、小学校算数「データの考察」の柱状グラフを用いた学習に移行。

   資料2P4

4. 個別の内容 「統合的な理解・総合的な発揮」に欠かせない知識・技能と思考力・判断力・表現力等に精選し、目指す資質・能力に焦点化して深く学ぶ余白を作る。

具体例

- 小学校算数のアール（a）・ヘクタール（ha）の学習で、㎡などとの単位換算は、複雑な計算練習中心から、概念理解（1haは100m×100mの面積であるなど）中心の学習に注力。
- 小学校算数の帯分数は、概念理解を中心とした学習に注力。
- 中学校数学の角の作図は基本的な角度の作図にとどめ、75°や105°といった応用的な角度の作図は触れる程度とする。

資料2P4

5. 個別の内容 「情報の領域」「情報・技術科」で指導を充実させることに伴う精選。

具体例

- 小学校算数「図形領域」の正多角形の基本的な性質で、プログラミングを必須としない。

資料2P4

6. 個別の内容 特に小学校5年は内容が過密との指摘があるため、学習の系統性に注意しながら、他の学年への振り分け・統合も含めて重点的に精選する。
資料2P4

パブコメで出た主な意見

- 計算や数量感覚などの基礎・基本はその後の学習の理解につながるので、それらを確実に身に付ける指導を重視すべき。 結果P7
- 高校で小中学校の内容に適宜戻れるなど、つまずいた生徒の学び直しの機会を設けてほしい。 結果P7
- 身近な課題や問題解決と結び付けた学習、社会とのつながりを踏まえた学習を通して、数学的な理解・技能・思考を身に付ける必要がある。 結果P7
- 2040年に理系人材が約120万人不足すると言われており、理数系進学のジェンダーバイアスを解消する具体策が求められる。 結果P7
- 全体として分量が多すぎるので精選を徹底してほしい。特に小学5年の指導内容が多すぎて、子供にも先生にも負担が大きい。 結果P7

理科 小・中・高

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

観察・実験と、その結果の考察に時間を回す。器具の操作だけを単独で指導・評価することを見直し、時間のかかる目視の観察はICTを併用して効率化。

※ 精選の検討は、諸外国のカリキュラムや国際学力調査なども考慮して行ったと資料に注記がある。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 解説で、「統合的な理解・総合的な発揮」の育成に必要な学習活動の事例を精選し、学習内容の扱いの程度を明示して、教科書の精選にもつなげる。調整授業時数制度を使った柔軟な教育課程編成もしやすくする。

   具体例
   - 中学校生物「生物の体の共通点と相違点」で、体の共通点と相違点を比べる学習活動の対象とする生物例を精選。
   - 中学校地学「太陽系と恒星」で、インタラクティブなコンピュータシミュレーションを積極的に用いて、視覚的に捉えられる工夫ができる旨を示す。

   資料2P4

2. 個別の内容 複数の事項に散らばっている内容を、一つの項目で多角的・系統的に学べるよう、一つにまとめるのが適当なものを移行・統合する。

   具体例
   - 中学校物理「光の反射・屈折」と「凸レンズの働き」を統合。
   - 小学校生物「種子の中の養分」と「植物の発芽」を統合。
   - 中学校地学「気圧」の学習における「圧力」の計算は、物理「水中の物体に働く力」に統合。
   - （小・中学校の接続を改善する観点で）中学校化学領域「水溶液」の小学校と重なる学習内容について、小学校で粒子のモデル（絵や図など）に関連付けて扱う。

   資料2P4

3. 個別の内容 現代的な実験・観察手法の進展を踏まえつつ、器具の操作だけが独立した学習内容にならないよう、実験や観察の操作方法・手法などの示し方を見直す。理科で引き続き重視する観察・実験と、その結果の考察に十分な時間を充てられるようにする。

具体例

- 顕微鏡や岩石の観察器具などの扱い方を、単独で指導・評価する技能とすることを見直す。
- 雲の動き、太陽の動きなど、目で見る観察に時間がかかる観察は、ICTを併用して効率化。

資料2P4

4. 個別の内容 「情報の領域」「情報・技術科」で指導を充実させることに伴う精選。

具体例

- 小学校物理「電気の利用」で、プログラミングを必須としない。

資料2P4

パブコメで出た主な意見

- 問いを立て、仮説を考え、検証し、結果を考察する過程を重視した探究的な学びが重要。 結果P7
- 理科では観察・実験の充実が重要なので、内容の精選で観察・実験に充てる時間を確保してほしい。 結果P7
- 理科の設備や備品・支援人材にかかる予算などを確保してほしい。 結果P7
- 「科学と人間生活」は、分野間の関連、他教科との関連、社会との関連を重視し、人類共通の課題を軸に構成すべき。 結果P7

音楽 小・中（高は芸術）

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

技能を生かして工夫して表現するプロセス全体を「思考・判断・表現」として一体的に整理。小学校の歌唱と器楽の内容区分を統合し、知識と技能も一体で示す。題材の数を絞って、つながりのある題材構成へ。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 技能を生かして工夫して表現するプロセス全体を「思考・判断・表現」として一体的に整理して事項を示し、活動を焦点化して題材数の精選につなげる。自分の思いや意図を体を通じて表現に結び付けていく、音楽科の特色を生かした授業につなげる。

   資料2P5

2. 個別の内容 今は別々の事項になっている内容を「統合的な理解・総合的な発揮」を踏まえて統合し、題材で扱う内容や数の精選につなげる。題材同士に関連性や系統性をもたせた、深い学びに役立つ指導を可能にする。

   具体例
   - 小学校の歌唱分野と器楽分野を「歌唱・器楽」区分に統合し、内容をまとめて示す。
   - 中学校「鑑賞」の「思考・判断・表現」について、三つの事項で示しているものを一つに統合して示す。

   資料2P5

3. 個別の内容 関連する「知識・技能」の内容を一体的に示すなどして、子供や学校の実態に応じた柔軟で効果的な指導を可能にする。

   具体例
   - 小学校「器楽」で、「楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わり」という知識の事項と、「音色や響きに気を付けて旋律楽器及び打楽器を演奏する」という技能の事項が別々に示されているのを統合して示す。

   資料2P5

この教科を含む「芸術」へのパブコメの意見は、芸術（パブコメの意見）にまとめています。

図画工作・美術 小・中（高は芸術）

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

発想や構想から工夫して表現するまでを一つの流れとして指導。共同制作は「一緒に作ること」そのものではなく、関わり合いを一人一人の豊かな発想につなげる場に。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 発想や構想をし、工夫して表現するまでのつながりの過程を「思考・判断・表現」として一体的に整理して事項を示し、活動を焦点化して題材数の精選につなげる。自分の思いや考えを体を通じて表現に結び付けていく、図画工作科・美術科の特色を生かした授業につなげる。
   資料2P5

2. 個別の内容 活動の具体性が高い記述を見直し、子供や学校の実態に応じた柔軟で効果的な指導を可能にする。

   具体例
   - 小学校「共同してつくりだす活動」について、活動自体を目的として示すことを改め、互いに関わりながら活動に取り組む中で、一人一人の豊かな発想などにつながるよう指導を工夫する方向で示す。

   資料2P5

3. 個別の内容 「表現」の「思考・判断・表現」について、「総合的な発揮」を踏まえて事項を統合し、目指す資質・能力に焦点化して深く学べる余白を作る。

   具体例
   - 中学校「生活や社会と美術」で、目的や条件などをもとに表現の構想を練る「思考・判断・表現」について、三つの事項で示しているものを一つに統合。

   資料2P5

この教科を含む「芸術」へのパブコメの意見は、芸術（パブコメの意見）にまとめています。

芸術（パブコメの意見） 小・中・高

この教科の変更点ページへ →

パブコメで出た主な意見

- 芸術教育では作品の完成度だけを競うのではなく、作品から表したいことを感じたり考えたり、それをどう共有するかを重視すべき。すべての子供が芸術を楽しみ、自分らしい表現を見つけ、作品を生み出す喜びを味わえる教育を実現してほしい。 結果P8
- 見通しをもって表したいことを見いだしながら表現を深めていく活動を「思考・判断・表現」とすることは合理的。そのうえで、観点別評価の考え方を分かりやすく整理してほしい。 結果P8
- 多様なメディアに関する内容の充実には賛同するが、その操作を学ぶことと、固有の表現を学ぶことは別である点に注意が必要。 結果P8
- AIについて、表現の過程を安易に任せず、ツールとして適切に使うという原則は大切。使い方は現場に余白を残してほしい。 結果P8

家庭 小・中・高

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

技能を一つずつ練習するより、一連の活動の中でまとめて身に付ける。「なぜこの縫い方を使うのか」など、製作の目的を考える授業へ。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 解説で、「統合的な理解・総合的な発揮」の育成に必要な学習活動の事例を精選し、必ず扱う・選択的に扱うなど学習内容の扱いの程度を明示して、教科書の精選にもつなげる。調整授業時数制度を使った柔軟な教育課程編成もしやすくする。
   資料2P5
2. 個別の内容 個別の技能などを別々に習得するのではなく、一連の活動の中で統合的に扱うことで「統合的な理解・総合的な発揮」の育成につながるよう、指導事項をスリム化・焦点化する。

   具体例

- 小学校「調理の基礎」で、「材料の分量や手順、調理計画」「材料に応じた洗い方、調理に適した切り方、味の付け方、盛り付け、配膳及び後片付け」など調理過程が細かく分けて示されていたのを改め、統合して一つの項目として示す。
- 小学校「生活を豊かにするための布を用いた製作」で、なみ縫いなど個別の技能の習得が学習の中心になる傾向を改めるため、「なぜその縫い方を用いるのか」など製作の目的・趣旨を重視する観点から精選。

資料2P5

3. 個別の内容 今は複数の事項に散らばっている内容のうち、一つにまとめるのが効果的なものを統合する。

具体例

- 小学校は「自分の成長と家族・家庭生活」と「家族や地域の人々との関わり」を「自分の成長と家族や地域の人々との関わり」に統合。
- 中学校は「自分の成長と家族・家庭生活」と「家族・家庭や地域との関わり」を「自分と家族や地域の人々との関わり・協働」に統合。

資料2P5

4. 個別の内容 上の学校種で統合的に扱う方が資質・能力の育成に役立つと考えられるものは、上の学校種の内容に移す。

具体例

- 小学校「快適な住まい方」の「住まいの主な働き」や、中学校「住居の機能と安全な住まい方」の「住居の基本的な機能」「家庭内の事故」は、高等学校に移行。

資料2P5

パブコメで出た主な意見

- 家庭や地域での生活体験の格差が広がる中、すべての子供に実践的な生活経験を保障する教育が重要。 結果P8
- 事故・病気・失業など生活上のリスクへの経済的な備えを考えることが重要。その際、社会保障制度の役割を理解し、状況に応じて選択・活用できる必要がある。 結果P8
- 生涯を見通した資産形成の必要性を理解し、長期的な視点で貯蓄・運用に取り組む態度を身に付けるため、資産形成の学習が確実に扱われることが重要。 結果P8

- 家庭科の先生の指導力向上が欠かせないので、専門団体の知見やリソースを積極的に活用し、研修体制を充実すべき。 結果P8

情報・技術（中）／情報（高） 小（情報の領域）・中・高

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

作図の手順や規則を覚えること自体を目的にせず、その意義や役割の理解を重視。新設の情報・技術科は、「深い学び」の実現や調整授業時数制度の活用を前提に「余白」をもたせて内容を設定。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 内容を充実させたうえで新設する情報・技術科については、「深い学び」の実現や「調整授業時数制度」の活用を前提に、必要な余白をもたせて内容を設定する。
   資料2P5

2. 個別の内容 材料加工、生物育成、エネルギー変換といった現行の技術分野の領域についても、「統合的な理解・総合的な発揮」を踏まえ、個々の知識の習得そのものを目的とする学習内容を精選する。

   具体例
   - 「材料加工とデジタル製作」では、一般社会の生産活動で情報技術を活用した設計図の作成が普及していることも踏まえ、等角図や第三角法などについて、作図手順や規則の習得自体を目的とする学習内容は精選し、その意義や役割の理解を重視する示し方とする。

   資料2P5

パブコメで出た主な意見

- 新しい教科・領域なので、専門の先生の養成・採用・配置、勤務時間内での研修、誰もが学習内容を理解して授業ができる教材の提供などの支援が必要。 結果P9

- 3DCAD・3Dプリンタの活用などが書かれているが、それを実現できる設備・環境が整っていない学校もある。どの学校でも次期学習指導要領の事項が実施できるよう、環境整備を進めてほしい。 結果P9
- 情報技術が高度に発展する時代だからこそ、情報技術を通した学びだけに偏らず、身体性を伴う体験を重視すべき。 結果P9

体育・保健体育 小・中・高

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

2年間のまとまりで計画して、毎年すべての運動をこなす状況をなくす。「種目」より「どんな動きを経験・習得するか」を軸に。必ず扱う内容＋選んで実施できる内容へ。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 運動やスポーツに関する内容は、2年間のまとまりごとに計画的に学ぶことを分かりやすく示し、示された運動を毎年すべてこなすという状況をなくして、資質・能力の育成に向けた意図的・計画的な指導のための余白を作る。

   具体例
   - 「体つくり運動系」の「多様な動きをつくる運動」「体の動きを高める運動」の指導を2年間で計画的に扱うことで、指導の意図にかかわらず示された内容を毎年実施するといった状況を解消。

   資料2P6

2. 個別の内容 指導する具体的な運動種目を限定的・個別に示すことを改め、どのような「動き」の経験・習得を目指しているかを軸に再整理する。すべての個別種目を網羅的に扱う状況をなくし、資質・能力の効果的な育成につなげる。

   具体例
   - 「陸上運動系」で、「跳」に関する種目として「幅跳び」と「高跳び」を個別に示していたものを「跳の運動」として整理し、「短い助走から踏み切って跳ぶ」という

「動き」を経験・習得することを意図していると示す。

資料2P6

3. 個別の内容 各運動領域で、必ず扱う内容と、選択して実施することが考えられる内容を整理し、「内容の取扱い」で示す。子供の状況などに応じた深い学びの実現を目指す。

具体例

- 「水泳運動系」で、「浮き沈みをしながら続けて長く浮くこと」は必ず学ぶこととしたうえで、「姿勢を維持しながらの泳ぎ」や「浮き沈みをしながらの泳ぎ」は、いずれかのみを指導することも可能であると示す。

資料2P6

4. 個別の内容 習得を目指す運動技能の水準が過度に積み上がらないよう示し方を見直す。高い水準の技能の習得などに重きが置かれがちな状況をなくし、仲間とともに運動やスポーツの楽しさを味わう機会を、より豊かに確保することを目指す。

具体例

- 「武道（柔道）」で、「基本となる技や連絡技を用いて相手を崩して投げたり、抑えたりするなどの攻防」と示していたものを、安全を確保したうえで「投げたり抑えたりするなどの簡易な攻防」程度の水準で示すことを検討。

資料2P6

5. 個別の内容 保健では、小学校は「身近な生活を中心とした基礎的な内容」、中学校は「個人生活を中心とした内容」、高校は「個人及び社会生活における内容」と、系統性を再整理したことを踏まえ、発達の段階に応じて学習に困難が確認される内容の位置付けを改める。特定の事柄の指導に時間がかかる状況をなくし、探究的な学びの時間を充実させるなど、深い学びのための学習活動を豊かにする。

具体例

- 小学校保健で、地域における保健に関わる内容など日常生活で認識しにくい内容は、学習指導要領実施状況調査の結果なども踏まえ、指導内容を位置付ける段階などを改める。

資料2P6

パブコメで出た主な意見

- 学習の系統性や子供の状況などを踏まえつつ、心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する学びとすべき。学校種間の連携も重要。 結果P9
- 運動やスポーツの指導は、得意・不得意などにかかわらず、誰もが多様な楽しみ方を豊かに味わえる授業改善を進めるべき。 結果P9
- 水泳の授業は、実技を通した学習機会の確保や、水難事故の防止につながる力の育成を大切にして検討を進めるべき。 結果P9
- 性暴力、薬物乱用など様々な健康・安全の課題が表面化する中、発達の段階などを踏まえながら、生涯にわたって課題に適切に対処できる資質・能力を育てる対応が必要。 結果P9

外国語活動・外国語（英語） 小・中・高

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

中学校の話題は「身近な社会的な話題」に。頻出の文法を具体的に示して焦点化。CEFRに照らして難しすぎる活動は見直し、先生の足場かけを前提に示す。語彙は、国が今後作る基盤語彙リストを基に、小中高を通して繰り返し扱う方向。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 すべての子供に指導すべき語彙数を精選しつつ、語彙の難易度や重要度などを考慮して、国が語彙選定のための「基盤語彙リスト」を作成する。教科書発行者には、リストに載っている語を教科書で使うことを推奨するとともに、小中高を通じて様々な場面などで繰り返し扱われることが望ましい旨を示す。これにより深い学びのための余白を作り、子供が実際に活用し使いこなせる語彙を増やす。
   資料2P6

2. 個別の内容 中学校の文法事項のうち使用頻度の高いものなどを本文や解説で具体的に明示し、指導対象の焦点化と難易度の適正化を図る。子供が頻出文法を一層使いこなせるようにする。

具体例

- 中学校の文法事項で「受け身」とあるところを、例えば「受け身（現在、過去、willを用いた未来）」などと具体的に示す。

資料2P6

3. 個別の内容 小・中学校で扱う話題のうち、難しすぎるものを見直したうえで、各学校種で扱う話題を整理して学年段階の目安を示し、身近なものから段階的に抽象的なものを扱うようにする。過度な難化や語彙数の増加を防ぎ、導入や内容を補うための活動を精選しつつ、資質・能力を効果的に身に付ける活動を重点的に実施できるようにする。

具体例

- 中学校で扱う「社会的な話題」を「身近な社会的な話題」とし、生徒が自分と関連付けて捉えられるようにする。それに伴い、小学校で中学校との接続の観点から設定されていた「社会的な話題」につながる内容は、日常的な「身近な事柄」などを扱うこととする。

資料2P6

4. 個別の内容 そのほか、現行の学習指導要領では各学校種のCEFRレベルに照らすと難易度が高い活動が規定・例示されている場合などもあるので、それらを見直す。先生の足場かけを前提として示すことが有効な場合は、解説でその趣旨や留意点を示す。

具体例

- 中学校で扱う社会的な話題を「身近な社会的な話題」とする。
- その場合でも、「身近な社会的な話題について、簡単な語句や文を用いて、聞いたり読んだりしたことを基に、考えたことやその理由を伝え合うことができる」などの内容はCEFRの文言にそのまま照らすとレベルが高い（B1）と捉えられる可能性があるので、「身近な社会的な話題については、皆が過ごしやすい学校づくりなど、生徒が興味を持ったり自分事化できるような話題を扱う」など、解説でその趣旨や必要な留意点を示す。

資料2P6

パブコメで出た主な意見

- コミュニケーション活動を大切にしながら、小学校から中学校にかけて、基礎となる音と文字の関係や、読み方・書き方などを系統的・継続的に学べるようにしてほしい。 結果P9
- 語彙や学習内容を精選するとともに、ALTなどの指導体制の整備が必要。 結果P9
- Let's Try!のデジタル化を進めてほしい。 結果P9
- 学習指導要領の改訂と大学入試の改善を一体的に進めてほしい。大学での学修や社会で必要な英語力と、入試で測る力の整合性などを示してほしい。 結果P9

特別の教科 道徳 小・中

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

1つの教材を複数時間で扱い、生まれた余白を問題解決的な学習や体験的な学習と組み合わせて「じっくりと深く学ぶ」道徳へ。教科書の読み物教材は精選。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 「主体的・対話的で深い学び」のための余白を十分に確保する観点から、1つの教材を複数時間で扱うこととする。それで生まれる余白を「問題解決的な学習」や「道徳的行為に関する体験的な学習」などと適切に組み合わせ、「深める教材」も活用しながら創意工夫することで、「じっくりと深く学ぶ」道徳科の学びを進める。
   資料2P7
2. 教科全体 こうした取組を実のあるものにするため、発達の段階に応じて教科書に載せる「深める教材」の数の目安を設け、「読み物教材」と合わせて35コマ分とすることで、教科書の「読み物教材」を精選する。

具体例

- 深める教材の数の目安：中学校13教材、小学校高学年8教材、小学校中学年4教材。

資料2P7

パブコメで出た主な意見

- 複数時間を使った指導では、扱う内容項目について考えが深まることが重要。手段が目的化して本末転倒にならないようにすべき。 結果P10
- 問題解決的な学習を「行動」を考えることに限らず、道徳的価値や実践上の困難を吟味する活動も含むものとして定義を広げるなど、二つの葛藤類型との関係を整理すべき。 結果P10
- いじめ・暴力などの危機や葛藤を扱う体験的な学習では、心理的安全性の確保などが必要だと明示すべき。 結果P10
- 読み物教材の精選と「深める教材」の充実を図る方向性は理解できるが、教材は総じて「読み物」ともいえるので、「読み物教材」の定義と判断基準を明示すべき。 結果P10

特別活動 小・中・高

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

評価は目標準拠評価から個人内評価へ（成長が顕著なら「◯」）。キャリア・パスポートは例示資料を廃止し、学校による引継ぎを求めないことを明確化。学級・ホームルーム活動の項目は統合。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 領域全体 特別活動の評価について、これまでの目標準拠評価を改めて個人内評価とし、総括的評価では、思考・判断・表現の過程で一体的に表れる「学びに向かう力」に関わる成長が顕著な場合に「◯」で評価する。これにより、過度な評価材料の収集を抑え、簡素化する。

資料2P7

2. 内容 小中高の内容の系統性を一層明確にするとともに、先生が年間を通じて扱う内容をきちんと把握できるよう、中学校・高校の学級・ホームルーム活動の項目の統合など、必要な見直しを進める。

具体例

- 高等学校：12項目の内容を9項目に統合。
- 中学校：11項目の内容を10項目に統合。

資料2P7

3. 内容 キャリア・パスポートについて、例示資料を廃止する。デジタル活用を進め、実態に合った「見通し、振り返る」多様な取組へ進化させるほか、学校による引継ぎを求めないことを明確にする。
資料2P7

4. 内容 クラブ活動について、社会教育との適切な接続や裁量的な時間との連携などを図りつつ、学年の縛りや学習活動をより柔軟に設定できるようにすることを明確にする。
資料2P7

パブコメで出た主な意見

- 子供の参画は教師の適切な指導が前提とされている。改訂の趣旨を現場で実現するため、指導の在り方や、先生に過度な負担を生じさせない運営の具体例を示してほしい。 結果P10
- 行事・集団活動のねらいを確かめ直し、「全員が同じ行動をとること」が目的化していないか点検し、参加の仕方の多様化を進め、その違いで不利益や排除が生じないようにしてほしい。 結果P10
- キャリア・パスポートは、記入・保管・引継ぎの負担や効果の不明確さが課題。特定の手段を一律に求めず、見直しを進める必要がある。 結果P10
- 合意形成のプロセスが示されたことを受け、手順が形だけにならないよう、合意形成の各段階で子供が働かせる「思考の視点」を具体的に示してほしい。「収束」が複数の案を1つに絞り込むものと誤解されないようにしてほしい。 結果P10

総合的な学習（探究）の時間 小・中・高

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

全体計画や評価規準づくりは本当に必要なものに絞り、評価材料の集めすぎを抑えてシンプルに。地域とのコーディネートは学校運営協議会や地域学校協働推進員と連携する選択肢を。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 領域全体 全体計画や評価規準の作成などについて、質の高い探究の実現に向けて本当に必要なものへと精選・重点化し、過度な評価材料の収集の抑制を含め、よりシンプルなものへ見直す。あわせて、多様な実践事例の共有を含めた条件整備を進める。
   資料2P7
2. 領域全体 地域などとのコーディネートにかかる負担の軽減に向け、学校運営協議会や地域学校協働推進員と連携する選択肢などを明確にする。
   資料2P7
3. 領域全体 情報の領域については、過度な負担や負担感なく質の高い授業ができるよう、教材や研修の機会などの条件整備を進める。
   資料2P7

パブコメで出た主な意見

- 探究の成果が入試などで評価される流れに触れているが、選抜で評価されることを前提に「好き」が選ばれるようになれば、「好き」が本人ではなく評価者の関心に合わせたものになり得る。その緊張関係を明示してほしい。 結果P10
- 総合と学校行事の連携が、かえって行事を一つの狭いテーマに落とし込む運用にならないよう、行き先や活動内容を複数設定して子供が選んで参加できるようにしたり、行事の事前・事後学習にマイ探究やテーマ探究を位置付けたり、学外に出て社会課題の視点で学ぶ機会（越境）を設けたりする配慮が必要。 結果P10

© 原田英語.com 次期学習指導要領ナビ（https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/）｜パブコメ結果と全教科の「精選」案まるごと解説（2026年11月25日公表）｜研修・校内での印刷・配布OK（連絡不要）

- 子供が自ら問いを立てることは重要だが、先生がそれをどう指導するかは十分に体系化されていない。具体的な指導方法をはっきり位置付けるべき。 結果P10
- 外部人材の確保や施設・活動の調整を先生だけに負わせず、負担軽減と支援の継続性を両立させるため、学校と地域をつなぐコーディネーターの配置が必要。 結果P10
- 多忙なので、情報の領域について計画・準備ができない不安がある。教材準備から学習内容までを全国共通のものとして整備してほしい。 結果P10
- 子供が外部に直接依頼することで課題が生じているので、校外への協力要請は学校や先生の管理のもとで行うことが必要。 結果P10

生活 小1・2

この教科の変更点ページへ →

授業はこう変わりそう

複数の内容を組み合わせた単元をつくり、重複や分散を防ぐ。1年と2年の両方で同じことをしなくてよい（例：1年は植物の栽培のみ、2年は動物の飼育のみとすることも可能）。

国の精選の検討状況（11月25日）

1. 教科全体 解説で、複数の内容を組み合わせた構成例を示すことで、複数の内容で構成される単元の設定を促す。これにより単元間での内容の重複や分散化を防ぎつつ、地域や実態に応じて調整授業時数制度を使った柔軟な教育課程編成もしやすくする。
   資料2P7
2. 個別の内容 一つの内容について、第1学年と第2学年のいずれでも実施しているような内容は、どちらかの学年だけで重点を置いて実施できることを示す。

   具体例

○ 第1学年・第2学年のそれぞれで植物の栽培と動物の飼育の両方を行っている場合が多いところ、例えば第1学年で植物の栽培のみ、第2学年で動物の飼育のみを実施することが可能であることを示す。

資料2P7

パブコメで出た主な意見

- 身体性が位置付けられたことで、身体性を伴う体験と多様な表現活動の往還を通して学ぶという生活科の本質が分かりやすくなった。 結果P8
- 幼児教育で学びの中心に位置付けられてきた「遊び」は、幼児教育と小学校教育をつなぐ重要な軸なので、遊びの価値は生活科の学習全体を支える前提として共有されるべき。 結果P8
- 生活科を小1から高3までを貫く「12年一貫の探究の出発点」として位置付け直し、中学年以降の学びとの接続を進めていく必要がある。 結果P8
- 学校での動物飼育について、多様な選択肢が示されたことは評価する。 結果P8
- 学校での動物飼育は、動物の習性などを踏まえた適切な飼育環境や管理体制などの確保を前提とすべき。または、動物や教職員の負担が大きいので段階的に廃止すべき。 結果P8

理数（高校） 高

この教科の変更点ページへ →

パブコメで出た主な意見

- 数学的・科学的に探究・考察する学びを重視すべき。数学と理科のつながりに加え、社会や生活との関連も具体例を通じて示すことで、生徒が理数を学ぶ意味を理解できるようにすべき。 結果P8
- 理系への関心の入口を広げるため、理数探究の題材などに身体知を含む多様なテーマを用意するとともに、他教科や大学との連携を進めるべき。 結果P8
- 動物を扱う探究活動について、研究倫理・生命倫理を踏まえたものになるようにしてほしい。 結果P8

※ 資料2（精選の検討状況）には、この教科等の項目はありません。

産業教育（高校の専門学科） 高

この教科の変更点ページへ →

パブコメで出た主な意見

- 産業教育は地域の企業や行政と連携しながら、その後の就職や地域での活躍につなげる必要がある。そのためには、地域で専門的な職業教育を学ぶことが魅力的な選択肢となることが必要。 結果P9
- 魅力ある学びのため、学習内容を社会の進展に合わせて更新するとともに、実習設備などの環境整備を進めてほしい。 結果P9
- 専門高校では、探究に向かう土台としての基礎学力の定着が必要。 結果P9

※ 資料2（精選の検討状況）には、この教科等の項目はありません。

6. 教科書と授業時数はどうなる？

資料2の参考資料から。教科書は「ページ数の上限の目安」まで検討課題に

教科書の検定基準の見直し（検討課題）

参考資料：次期学習指導要領の実施に向けた教科書の改善に関する検討課題（2026年10月13日 教科用図書検定調査審議会 資料5より抜粋）

- 学習指導要領の目標・内容の構造化とその趣旨を踏まえた教科書になるよう、教科共通の基準の要件の見直しを検討してはどうか。 資料2P8
- 今の検定基準は「教科書の内容に、学習指導要領に照らして不必要なものは取り上げていないこと」と定めているが、教科書の

調整授業時数制度と「学習枠」

調整授業時数制度とは

子供の実態や課題に応じた柔軟な教育課程編成を可能にする制度。対象の教科等それぞれで標準授業時数の最大15%を下回ることができ、その時数を「裁量的な時間」（学習枠・研究・研修等枠）や、既存教科への上乗せ・教科の新設に使える。 資料2P9

どれくらい？

すべての対象教科等で限度まで標準を下回った場合、最大で小学校138コマ・中学校128コマ（週4コマ程度）。研究・研修等枠は最大35コマ（週1コマ程度）。いずれも最大限大きくとった場合の想定で、制度全体として

精選や、教科書以外の
教材との役割分担の必要性を
踏まえて見直しを検討しては
どうか。 資料2P8

- 小・中学校の授業時数について、
調整授業時数制度を使った
場合でも指導できる教科書に
なるよう、見直しを検討しては
どうか。 資料2P8
- 教科書のページ数の増加と
大判化の傾向が長く
続いてきたことも踏まえ、先生と
子供の双方に「余白」を
生み出すため、教科書の
種目ごとにページ数の上限の
目安を示すなどの必要性をどう
考えるか。 資料2P8

※ いずれも「検討してはどうか」「どう考えるか」という問いかけの段階です。

中央教育審議会で検討中。コマ数は
現行の標準授業時数をもとにした
もの。 資料2P9

対象外の教科等

特別活動、道徳、外国語活動、
音楽・美術（中2・3）など、
調整後に35コマ以下となる教科等は
対象外。 資料2P9

いつから？

令和9年度（2027年度）に
サキドリ研究校を大幅に増やし、
令和10年度（2028年度）から
全国で先行実施を可能とする方向で
検討。 資料2P9

学習枠の6つの要件

①各教科等の内容に当たらない、または
どれか一つの教科等に当てはめるのが
難しい学習活動であること ②教科等の
内容と一部重なる場合は、その内容を
教科等でしっかり扱ったうえで、拡充・
発展、試行的な取組、課題の
大きい内容のフォロー、学年を超えた
縦割りの実施などの付加的な活動として
行うこと ③子供の実態を踏まえ、教育の
目標の実現に特に役立つこと ④学校の
教育目標・教育課程編成の基本方針・
年間指導計画などに基づく組織的な
取組であること ⑤発達の段階に
即して適切であること ⑥転出入への
配慮など教育上必要な配慮がされている
こと。 資料2P10

学習枠の4つの類型（例）

1.個に応じた学習過程の充実
（個人探究課題の深掘り、
自己調整学習、認知特性等に応じた

個別指導・学習カウンセリング、
下学年の未習得事項の学び直し） 2.
学習の素地を高める取組（体験活動、
企業・団体等と連携した取組、
言語能力・情報活用能力の重点的育成、
認知機能強化、学習方略やメタ認知の
体系的指導） 3.関係性の質向上・学習の
円滑化（いじめ防止や安全、
ソーシャルスキル） 4.地域等の特色を
生かした取組（特別支援学級・学校との
交流及び共同学習、地域の多様な大人と
関わる活動、現代的な諸課題に対応した
教育活動）。 資料2P10

7. 子供たちは何と言った？（子供への意見聴取）

特別部会の参考資料7。授業・教科書・評価について、小1〜高3年代の声

どんな調査？

こども基本法の趣旨も踏まえ、子供の思いや願いを学習指導要領の検討に生かすため、こども家庭庁の「こども若者★いけんぷらす」の枠組みで意見を聴いたもの。テーマは「みなさんが願う人生や社会にするために、学校でどんな学びが大切ですか？」。対象は小学校1年生〜高校3年生年代、時期は2025年1〜2月。アンケート（回答187件）、オンライン（参加132人）、特別支援学校・学びの多様化学校など7校に出向く形（参加47人）の3つの方法で行った。 子供の声P1 子供の声P4 子供の声P5 子供の声P6

ワクワクした授業

- 実験・栽培・
  プログラミングなど、実際に
  体験して手を動かす授業

がっかりした授業

- 板書を写すだけ、教科書を
  読み上げるだけの一方的な授業

- 雲の動きから翌日の天気を予想するなど、学んだことが生活や社会とつながる授業
- 作文や発表など、自分の考えを伝える授業
- 自分で決め、調べ、まとめる「自分で学びを進める授業」
- 班で作戦を立てたり教え合ったりする授業、クイズやゲームを取り入れた授業

子供の声P1 子供の声P19 子供の声P20

- 練習問題を解き続けるだけなど、自分で考えることがない授業
- 分かっている内容の繰り返し、逆に半分が分からないのに進むなど、レベルが合わない授業
- 板書が速い、コツを教えてくれないなど先生の教え方、発音をからかう雰囲気

子供の声P1 子供の声P21 子供の声P22

力をつけるために望む授業（小5以上）

- 話し合い・ディベート、ALTや外国の人と話す機会など対話のある授業
- 生徒が主体となり、自分で見つけた課題を協力して解決する授業
- 習熟度別や自由進度学習など、自分のペースに合った授業
- 見学・職業体験・実験などの体験型の授業
- 年金・投資・法律・模擬選挙・メディアリテラシーなど社会とつながる授業
- デジタル端末を使って自分のペースで学ぶ授業

教科書への声

- ポイントがまとまっていない、大事な言葉に対して文章が多すぎる
- 例や答えが先に載っていて自分で考える余白がない
- 分量が多く授業が速足になる、重い・持ち運びにくい
- 答えや解き方の説明が足りず復習しにくい
- 要点まとめ、すぐ答えが見えない作り、書き込めるデジタル教科書や音声読み上げなどへの期待

子供の声P1 子供の声P28 子供の声P29 子供の声P31 子供の声P32

子供の声P1 子供の声P23
子供の声P24 子供の声P25

やる気が出る先生の関わり

- 「大丈夫だよ」などの励まし、「ここまでは合っている」と部分を認める言葉
- 「すごいね」だけでなく、どこがよいかを具体的に・途中の過程を褒める
- 答えではなくヒントやコツ、理解の確認、発表の土台を先に示す
- 分かっているところは先に進めてよいなど、自主性を尊重する
- 成長や考えの変化を見てくれる、弱点に合わせたプリントなど、自分を見てくれる姿勢

子供の声P1 子供の声P35
子供の声P36 子供の声P37

やる気が出る成績のつけ方（小5以上）

- テストだけでなく、話し合いやワークなど学ぶ過程も評価してほしい
- 評価の項目や基準を示してほしい、先生や学校による不公平をなくしてほしい
- 頑張った点や改善策のコメント、学期の途中での状況の伝達など丁寧なフィードバック
- グラフなどで自分の伸びが見えるように、△などを前向きな表記に

子供の声P1 子供の声P38
子供の声P39 子供の声P40

印象に残った声（要旨）

小1〜4 地域のメロン畑で世話や収穫を体験し、地域の人と交流できたのがうれしかった。 子供の声P19

中学生 チーム対抗のゲーム形式の英語の授業は、ぼーっとする時間がなく集中できる。 子供の声P20

高校生年代 教科書を読み上げるだけの授業なら、

中学生 英語は文法中心だが、話し合いやリスニング、

学校で受けなくてもよいと思った。 子供の声P21

スピーキングを学べるようにした方がよい。 子供の声P23

小5・6 教科書に例が3〜4つあると意見が教科書のままになる。1〜2つにして、自分たちで解き方を探したい。 子供の声P28

中学生 小学校で英語が始まったからといって、中学校で急に難しくなるのはおかしい。 子供の声P30

中学生 「意見を言ってくれる人？」では手を挙げにくい。発表の仕方や考える土台を前もって示してほしい。 子供の声P36

高校生年代 学期の途中でも、成績の状況と何を頑張ればよいかを教えてほしい。 子供の声P39

※ 子供の声は当サイトが要旨にまとめたもので、原文そのままではありません。

8. よくある疑問

Q パブコメの結果を受けて、案はもう変わったの？ −

現時点では、パブコメを踏まえた具体的な修正内容は公表されていません（e-Govの結果ページの「提出意見を踏まえた案の修正の有無」の欄は「ー」）。文部科学省は、意見を答申案や告示案のほか、答申・告示のあとの条件整備などで勘案するとしています。

資料1P2

Q 一つ一つの意見に国の回答（考え方）はあるの？ −

今回公表されたのは「主な意見の概要」で、意見は内容によって集約されています。意見ごとの回答は付いていません（意見募集の要領でも、個別の回答はしないと案内されていました）。

結果P1 結果P2

Q 「精選」で、教える内容はどれくらい減るの？ −

今回示されたのは各教科等の「検討状況」と具体例で、全体でどれだけ減るかの数字はまだ示されていません。告示や解説を作る中で、文部科学省がさらに具体化するとされています。

資料2P2

Q また意見を出せる機会はある？ −

あります。告示案（学習指導要領の案そのもの）について、年度内にもう一度パブリックコメントを実施する予定とされています。

資料1P2

Q ここに書かれている教科の変化は、もう決まったこと？ −

いいえ。精選の内容は11月25日時点の「検討状況」で、答申・告示に向けて変わる可能性があります。正式な内容は告示（小・中は2026年度末の予定）で確定します。

資料2P1 資料1P2

9. これからの日程

次の注目は12月7日の特別部会の「答申（案）」

2026年11月30日 決定

教育課程部会（第137回）：答申（案）に向けた検討（ヒアリング・パブコメの結果概要、各教科等の精選の検討状況など）

2026年12月7日 決定

教育課程企画特別部会（第24回）：答申（案）について

2026年度 冬ごろ 見込み

中央教育審議会の答申

年度内 予定

告示案（学習指導要領の案）のパブリックコメント（もう一度）

2026年度末 見込み

小・中学校学習指導要領などの改訂（告示）

最新ニュース・予定を見る
全教科の変更点（審議まとめ）
全教科の10秒早見表

出典（すべて一次資料）

- 「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ」に関するパブリックコメント（意見公募手続）の結果について（文部科学省 初等中等教育局教育課程課、2026年11月25日）
- 教育課程企画特別部会（第23回・2026年11月25日）資料1「審議まとめに関する関係団体ヒアリング及びパブリック・コメントの実施概要及び寄せられた主な意見等について」
- 教育課程企画特別部会（第23回・2026年11月25日）資料2「各教科等の内容の精選の検討状況について」
- 教育課程企画特別部会（第23回・2026年11月25日）参考資料7「学びの在り方等に関する子供への意見聴取（結果の概要）」
- 文部科学省 報道発表（2026年11月25日）／e-Gov パブリック・コメント 結果ページ／特別部会（第23回）配付資料の一覧

結果P○はパブコメ結果PDF、資料1P○ 資料2P○ 子供の声P○は特別部会の資料のページ（PDFの何ページ目か。表紙を1と数えます）。押すとそのページが開きます。要約は当サイトの言葉で、原文の文をそのまま写してはいません。

© 原田英語.com 次期学習指導要領ナビ（https://www.haradaeigo.com/jikigakushushido/）｜パブコメ結果と全教科の「精選」案まるごと解説（2026年11月25日公表）｜研修・校内での印刷・配布OK（連絡不要）